

## プラトンの美學 (承前)

深田 康算

## 十二 (つゞき)

『蓋し上に述べた如き順序に於て愛の途を攀ぢ登れる者が已に其頂上に近いた時忽ちにして見るを得るであらう所のものは誠に驚くべく美なるもの、一今迄辿り來りし所は實に盡く唯單に其のためであつたのに過ぎぬ所のもの、一である。そは永劫に在る所のもの、生成することなく又死滅することなきもの、増すことなく又減することなきものである。そは一面からは美にして一面からは醜なるもの、或時は美にして或時は美ならざるもの、これと比すれば美にして彼と比すれば醜なるもの、此所では美彼所では醜、此人に取りては美彼人に取りては醜なる如きものでもない。そは又顔面や手足や其他身體に屬する所のものに於ける美でもなく、言説や知識に於ける其でもなく、又其他例へば生物や地や天やに認めらるゝ美でもない。寧ろ到る所永遠に、其自らに於て其自ら美なるものである。總てありとある美は皆此美に

分興することに依りて美たるを得る。而して其等の諸の美は或は生成し或は消滅するに拘はらず此美は増すこともなく又減することもなく、常に同じくして常に變はることなきものである』

美しき少年を愛することは、斯くして、吾々を先づ或一人に對する愛から次ぎには總ての身體に於ける美に對する愛に到らしめ、順次に身體に於ける美から精神に於ける美に、行爲行動に於ける美から知識に於ける美に到らしめる。さうして遂には彼の唯一の知識即ち美其自の知識に到達せしめる。此途は即ち眞の愛の途である。此所に到つて愛は始めて其窮極に達する。而して純粹に混りなき美其自を見得たる者が眞に人間として生きることを云へる。人間的肉や色彩や其他地上的雜物に煩はさるゝことなき神的なる美其自を見之れと一つになれる者は、もはや映像に捕はるゝことなく眞實なるものに接觸したのである故に、愛の映像をではなく愛の眞實の姿を生み出すことが出来る。斯くして眞の徳を生み且つ育てる者は神々に依りて愛せられ、さうして、不死的となる。(二二D—二二A)

## 十 三

「シムボシオン」に於ける愛の説は、上述の如く、愛の對象を美に在りとし、眞の愛の對象を美其自ら若しくは美のイデアに在りとするのである。其點だけに就て云へば、ありとある諸の美が美其自らへの分與に依りてのみ美となると説いてゐるプラト一の孰れの所説に對しても「シムボシオン」は矛盾するものではない。「フェドロス」に於て身體美が美の代表的なるもの中心的なるものとせられてゐる所以も亦美其自ら若しくは美のイデアが之れに現はれるのに據ると云ふより他の理由に基くものなのではないことは吾々の已に述べた如くである。美のイデアに依りての美の規定はプラト一の美學に於て根本的原理とも云ふべきもの、美に就ての彼の諸言説を通じて終始更はらざる主張である。

併しながら、一方に於て「フェドロス」に於ては、美のイデアが身體美に於て自己を顯現すると説かれてゐるのに反して、他方に於て「シムボシオン」に於ては、美のイデアを見るものは人間的肉や色彩や其他あらゆる地上的雜物から離脱せる神的なる美其自らを見るのであると云はれてゐる。前者に於ては、美のイデアの（現象的）可視性が説かれてゐるのに反して後者に於ては、美のイデアはあらゆる可視的人間的地上的なものを全然超越せるものとして語られてゐる。此點から云へば「フェドロス」と「シム

ポシオン」どの間に矛盾が認められると云ふのは全然理由なき批評ではない。「フェドロス」に於ける身體美の高唱は「シムポシオン」に於ける精神美の力説と矛盾するとも云へる。又「フェドロス」に於ては美のイデアの特殊性が確保せられてゐるのに反して「シムポシオン」に於ては美のイデアはイデア一般の中に姿を没し去つたとも云へる。前者に於ては美のイデアは善のイデアと異なり地上に於て回憶せられ得ると説かれてゐるに反して、後者に於ては美のイデアは善のイデアと共に、若くは「シムポシオン」に於ては、美其自らは善其自らに外ならぬ故に、嚴密には「善のイデアと異ならざるものとして、所有地上的なるものを超越すると説かれてゐるからである。

併しながら「フェドロス」と「シムポシオン」どの間に認められなければならぬと云はるゝ所の此矛盾は、吾々の見る所に依れば、決して此二つの對話篇の間に存在する矛盾と見做さるべきものではない。問題は尙少しく奥の方に在るとも云へるであらう。事實この兩篇の間に、一見矛盾とも見らるべきものがあるのに拘はらず、矛盾の實はないであらうこと、及び若し兩篇の間に矛盾が認められなければならないのならば、それは「フェドロス」其自身の中に已に其同じ矛盾が指摘されなければならぬであらうことは、吾々の先きに述べた如くである（十一參照蓋し叙述の便宜上兩篇に現はれてゐる

る所のそれ〴〵著しき言説を抽出して「フエドロス」は身體美を「シムポシオン」は精神美を高調してゐると解説するのは誤りではない。「フエドロス」に於ては美の特殊性としての可視性が身體美の概念に於て確立せられてゐると云ひ「シムポシオン」に於ては精神美の概念に於て善が美の原理たる地位を奪つてゐると解説するのも亦誤りではない。吾々の上述せる所から已に十分に明らかなる如く、兩篇のそれ〴〵力點を置いて説いてゐる所は誠に此の如くなのである。併しながら之れを以て直ちに兩篇が互に相矛盾してゐると断定するのは少くとも早計たるを免れぬと云はなければならぬ。何故ならば身體美を高調する「フエドロス」に於ても已に『内的美』が語られてゐる。身體美は其所では一面に於ては美のアイデアの自己顯現であると思はれてゐる。身體美は其所では一面に於てはアイデア一般への回憶の手段とも見做されてゐる。さうして又美のアイデアは其所ではやはり善のアイデアに對して下位に置かれてゐる。今此の三つの點を注意しつゝ「フエドロス」を「シムポシオン」に比較するならば、吾々は遂に兩者の間に何等の矛盾も實は存在せぬことを發見しなければならぬであらう。身體美が「フエドロス」に於て高調せられてゐる所以と精神美が「シムポシオン」に於て高調せられてゐる所以とは畢竟同一なる根本思想の上に立つものに外ならないので

ある。『内的美』若しくは精神美が『外的美』若しくは精神美よりも優れたるものなること、總て地上的人間的なるものがイデアの世界の顯現若しくは映像であり又でるに過ぎぬこと、さうして又善のイデアは美のイデアに對して優位を占むるものなること、此三つの思想は「フエドロス」とさうして「シムポシオン」に全然共通なるものなのである。

さうであるからして、若し身體美の高調と云ひ精神美の高調と云ふ此の二つの相矛盾せる如き言説が「フエドロス」と「シムポシオン」に見出されるとするならば、さうして前者に於ては愛は身體美即ち美其ものに向ひ、美のイデアの觀照其とに於て終ると説かれてゐるのに反して、後者に於ては愛は精神美即ち美其ものではなく寧ろ善に向ひ、美のイデアの觀照其とに於て終らずして、善の生誕に於て若しくは吾々が不死的となるに於て、始めて完成すると説かれてゐるとするならば、さうして其故に「フエドロス」に於ては美の特殊性が確立せられてゐるのに「シムポシオン」に於ては美以外に横はる所の原理なる善が美の等級附けの標準とせられてゐるとして、兩者の間に矛盾が認められるとするならば、一吾々は此矛盾と呼べるゝ所のものを寧ろ兩篇それ〴〵の課題の相違に基けるものとして、換言すれば同一思想の別様なる展開と

して、解釋するより他に途を持たないと云へる。而しく今暫らく吾々の見る所に從つて敢えて云ふならば「フエドロス」は美を主題とするものであり「シムボシオン」は美を善との關係に於て説くものであると見做すべきではないであらうかと思はれる。「フエドロス」は美を主題とせるもの、美が云はゞ其自らに於ては如何なるものであるかを説かんとするものである。其故に其所では身體美が高調せられ、さうして可視性が美のイデアの特殊性として説かれてゐる。身體的可視的なるものゝ美と雖もイデアへの分與に依りて始めて美たことを得べきであるが故に、美のイデアが其所に語られてゐる。而して美は身體的可視的なるものに就てのみ（プラトニーに取りても）正當には云はれ得べきであるが故に、美のイデアの特殊性として可視性が其所に語られてゐるのである。「シムボシオン」は善を主題とするもの、善に對する關係に於て美を説かんとするものである。其故に此所では精神美が高調せられ、さうしてイデアとして善のイデアと同一視せられたる美のイデアの超越性が語られてゐるのである。成程かくの如く「フエドロス」に於て美のイデアの可視性が説かれてゐるのに反して「シムボシオン」に於て美のイデアの超越性が『國家論』四七六Bに於けると同様に説かれてゐるのは、ソルターの述べてゐるやうに一見矛盾とも見られる。併し

ながら、此矛盾を解決し得べき唯一の鍵は實に「フエドロス」と「シムポシオン」に於ける『美』の意味の大なる相違を注意することに依りて與へられるであらう。「フエドロス」に於て身體美と云ひ美のアイデアと云ふ所のものと「シムポシオン」に於て精神美と云ひ美のアイデアと云ふ所のものは、同じく『美』と呼ばれてゐるに拘はらず、實は全く別物である。「シムポシオン」に於て精神美が高調せられ、美のアイデアの超越性が説かれてゐるのは、畢竟美が高調されてゐるのでもなく又美のアイデアの超越性が説かれてゐるのでもない。精神美とプラト一の呼ぶ所のものは、吾々が形式的美に對して表情的美と呼ぶ所のものでもなく又調和的美に對して性格的的特性的美と吾々の呼ぶ所のものでもなくして、精神美とはプラト一に従へば徳若しくは善に外ならないのである。精神美の身體美に對して有する優位とは其故に美に對して善の有する優位と云ふことより他の何ものでもない。而して又「シムポシオン」に於て其の超越性が説かれてゐる美のアイデアは「フエドロス」に於て其の特殊性として可視性が説かれてゐる美のアイデアではあり得ない。「フエドロス」に於ける美のアイデアは善のアイデアから區別せられたるものとして其特殊性を可視性に有する。「シムポシオン」に於ける美のアイデアは之に反して善のアイデアと區別せられない。寧ろ善のアイデアが此所で



は其儘美のイデアと呼ばれてゐるのである。

斯く見做すことに依りて吾々は始めて「フエドロス」と「シムポシオン」の間に認めらるゝと云ふ所の矛盾を解決し得るのではないかと考へる。一を身體美の高調と見他を精神美の高調と見る時——一は美のイデアの可視性を説くのに他は美のイデアの超越性を説くと見る時——此二つの言説が同じ一つの美に就ての論述であると見做す限り、兩者の間の矛盾は吾々に取りては之を解決すべくあまりに大なるものになければならない。唯彼は美に就て語れるもの、此は善に就て「若しくは美を善との關係に於て語れるものと見做すことに依りてのみ此矛盾の實は矛盾ならざることが始めて觀取せられるであらう。——斯くして吾々はユーリウス、ワルターが「前掲書三〇五頁」シムポシオンに於ける言説を以て美以外の原理たる善を美の階級附けの尺度とするものと做す見解に同意しつゝ、而かも恰も其故に「シムポシオン」の言説は「フエドロス」の其と矛盾せぬことを彼に對して辯駁し得る。蓋しワルターは「シムポシオン」に於て與へられてゐる所の精神美の身體美に對して有する優位が美のイデアの特殊性として「フエドロス」に於て確立せられてゐる所の可視性を標準としての等級附けではなくして、寧ろ善の生誕の助産婦として美を見る所の立場からしての其

に過ぎぬこと、従つて「フェドロス」は『理論的』であるが『シムポシオン』は『實際的』傾向に支配せられてゐることを注目した。併し「フェドロス」に於ける所謂美のイデアが「シムポシオン」に於ける所謂美のイデアと全然別のものであるとは彼は全く注意してゐないのである。彼が「シムポシオン」に於ける美其自らに就ての叙述を以て「大ヒッピアス」に於ける其の叙述と全く同様のものと見做してゐる（前掲書三〇七—三〇九頁参照）如きは明らかに此事を證明してゐると云へる。「シムポシオン」に於て『驚くべく美なるもの』『常に同じくして常に變はらざる』『神的なる美其自』として語られてゐる所のは、決して單なる美のイデアを指すものではなく、況んや美の概念を指すものではない。此所に所謂『美其自ら』として語られてゐる所のものが（それがプラトンのイデア論に於て極めて重要な個處たることは云ふまでもない）『彼の唯一の知識』を指すのであり善のイデアに外ならぬことは『之れを見之れど一つになれる者はもはや映像に囚はるゝことなく眞實なるものに接觸したのである故に、愛の映像をではなく愛の眞實の姿を生み出すことが出来る。斯くして眞の徳を生み且つ育てる者は神々に依りて愛せられ、さうして不死的となる』と云へるによつて明らかである。さうであるからして、善のイデアに就て其超越性が語られ、さうして

此の如き意味に於ての精神美(即ち善)が身體美(即ち美)に對して有する優位が語られてゐる所の「シムポシオン」は、美のイデアに就て其可視性が規定され、さうして此の如き意味に於ての身體美が美の代表者として擧げられてゐる所の「フエドロス」と何等矛盾する所がないと云はなければならぬ。「フエドロス」はワルターの評した如くに成程『理論的』とも云へる、又「シムポシオン」に於ては『實際的』傾向が支配してゐるとも云へやう。併し『美』に就てのプラト一の思想は此兩篇に於て矛盾を示してゐるとは云へない、加之理論的と實際的との見地の混交をさへも認めることが出来るとは云へない。吾々が「フエドロス」と「シムポシオン」を以て同じ思想の別様なる展開であるとし、前者は美を、後者は善を(若しくは美を善との關係に於て)説かうとしたものを見做さんとするのは其故である。

上述の如くにして、吾々は、美に就て語れるプラト一の諸篇の中最も主要なる二つものゝ間に認めらるゝと云ふ矛盾をば、兩者に於て説かれてゐる『美』若しくは『美其自ら』が持つてゐる所の意味の二様なることの注意に依つて解決し得ると思ふ。併し問題は前にも云つた様に實は尙少しく奥の方に在る。――

可なり數多くの諸問題を始める此問題は

『若し「シムポシオン」に於て美其自らとして語らるゝ所のものが善其自らを意味するのであるとすれば、善が如何にして美と呼ばれ得たのであるか』  
 と云ふ最も手近かなるさうして最も根本的なる形に於て吾々の前に置かれる。さうして

『善を美と呼び善其自らを美其自ら若しくは神的なる美其自らと呼んだプラトンは果して如何にして又何所まで善と美とを區別する規準を立て又保ち得たのであらうか。美のイデアの特殊性として打建てられた可視性は果して如何なる意義を有するのであるか。イデアが可視的たり得べしとは如何なる意味に於て可能なのであらう。身體美が美の代表的中心的たり得る所以は何にあるのであらう。精神美が單に善若しくは徳としてではなく、美として成り立ち得ることは不可能であらうか』

是等は彼の一つの問題の中に含まれてゐる若しくは其から引き出され得る所の諸問題の或ものである。(未完)